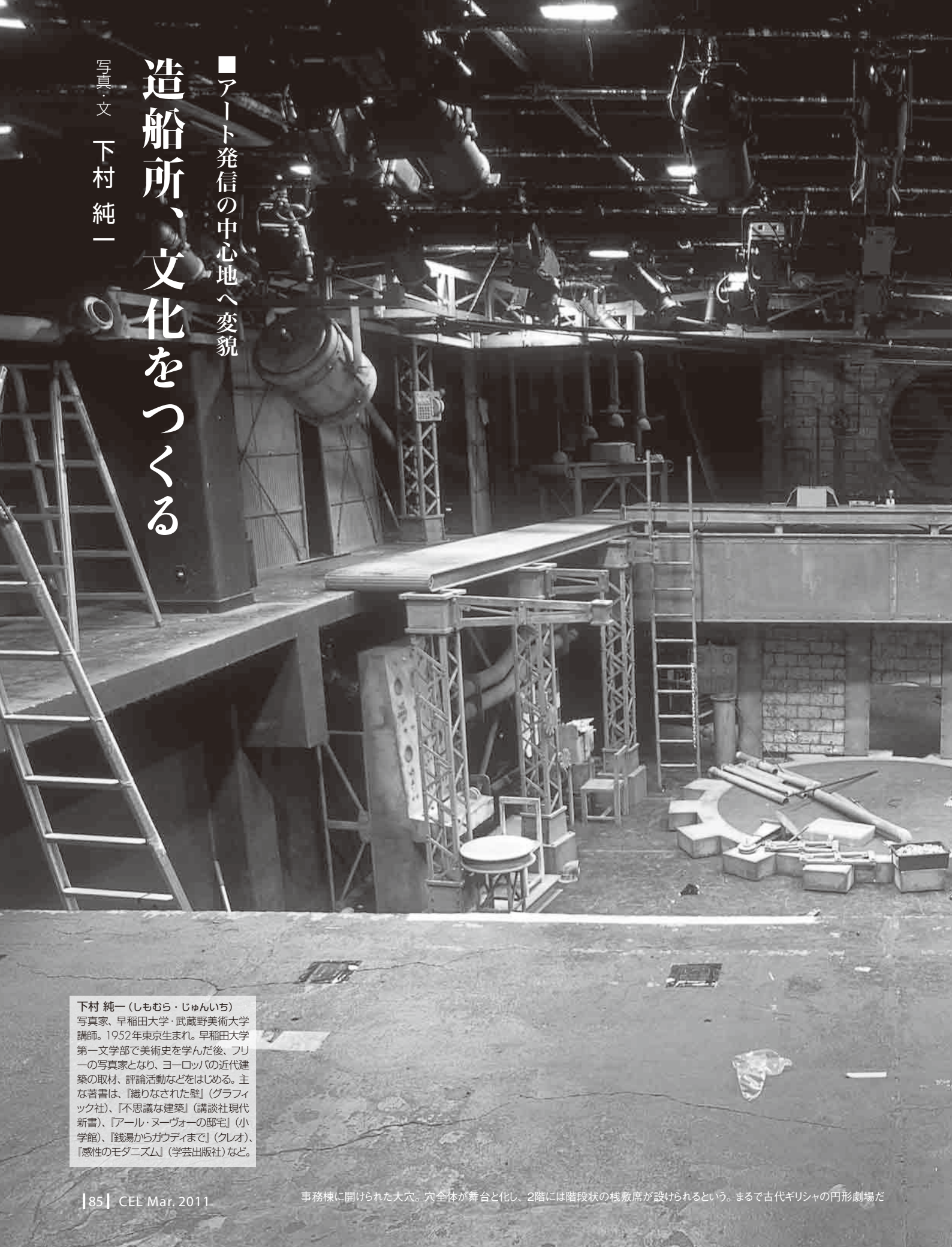




関西 KANSAI
近代化遺産
Heritage of Industrial Modernization
紀行 [最終回]
Junichi Shimomura

■ 名村造船所跡地 (大阪府)

大阪湾に近いことから、かつて重厚長大産業の集積地として日本の近代化を支えてきた木津川流域。大阪に本社を置き不動産業を営む千島土地株式会社は、そこに土地を所有し、その中の約42,000㎡を昭和6(1931)年から株式会社名村造船所に賃貸していた。「名村造船所大阪工場」として長年に渡って使用されていたその場所が、産業構造の変化に伴う造船所の移転により昭和63(1988)年に返還され、経済産業省によって「近代化産業遺産」にも認定された。その後、平成21(2009)年からこの地の有効利用を図ることを目的とするプロジェクト「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想」を開始。かつて2万人を超える造船労働者で盛況をみせた北加賀屋一帯を「文化芸術が集積する創造拠点」とするため、現在、同造船所跡地をアート発信の中心地として再利用している。



■アート発信の中心地へ変貌

造船所、文化をつくる

写真・文 下村純一

下村 純一（しもむら・じゅんいち）
写真家、早稲田大学・武蔵野美術大学
講師。1952年東京生まれ。早稲田大学
第一文学部で美術史を学んだ後、フリー
の写真家となり、ヨーロッパの近代建
築の取材、評論活動などをはじめ。主
な著書は、『織りなされた壁』（グラフィ
ック社）、『不思議な建築』（講談社現代
新書）、『アール・ヌーヴォーの邸宅』（小
学館）、『銭湯からガウディまで』（クレオ）、
『感性のモダニズム』（学芸出版社）など。



昭和40年代に建てられた事務棟がすぐ脇に立つ旧名村造船所大阪工場のエントランス。ギリシャ人アーティストがコンクリートの塀に描いたイラストが楽しく踊る



国土を整備し、都市を形成し、産業基盤を築く。その近代化の道程でつくり出された物たちの今は、現役継続か、あるいは資料として保存のどちらかになることが大半だ。この連載で、これまで訪ねた布引のダムや地下鉄御堂筋線は前者であり、毛馬の運河や生野銀山は歴史を刻む遺構として保存展示されている。そのどちらにも属さない、いわば近代化産業遺産活用の第3の道を探るプロジェクトが進行していると聞き、訪ねてみた。木津川河畔の北加賀屋の地で昭和6(1931)年から昭和54(1979)年まで稼働していた「名村造船所大阪工場」の跡地利用をめぐるプロジェクトである。

経済産業省の「近代化産業遺産群33」に認定されるよりも早く、その3年前の平成16(2004)年から、ここを芸術文化の拠点に育てるべく「NAMURA ART MUSEUM」はスタートした。旧工場のドック(船渠)2基と事務棟、工場棟を残しつつ、演劇や展覧会などが行われる場へと変身させようという大胆な試みである。そんなことが、果たして可能なのだろうか。

30数年前まで操業していた工場ということもあって、近代化産業遺産としては、まだ新しい部類に入るため見た目にも古さは感じられない。むしろ人が去り、音の絶えてしまった寂しさに跡地は支配されていた。4万トン級のタンカーも造っていたドックには、巨大なウインチや鉄鎖が赤錆びを浮かせたまま放置され、壁を失い鉄骨を晒した工場棟がひとりポツンと立っている。

殺風景とは、まさにこうした場のことかと感傷的な気分になりながら足を踏み入れた旧事務棟で、様相が一変した。2階の床の一



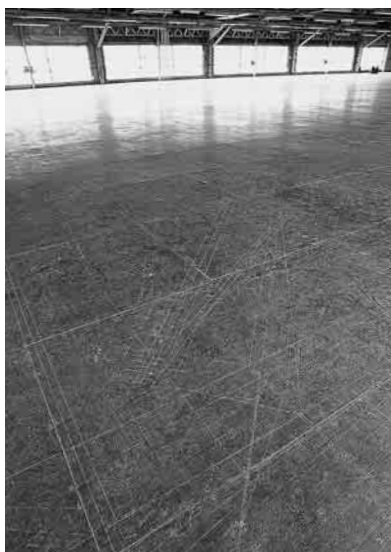
42,000㎡の工場敷地に残る2基のドック。木津川対岸に立つ製鉄所とともに、かつて隆盛を極めた工場地帯だったことをうかがわせる



鉄骨組だけを残すドック脇の工場棟。まるで、これから新たに建設がなされるかのような雰囲気を持っている



もはや稼働することもないウインチは、鉄のオブジェと化している



部を取り除いて吹き放ちの空間が設けられていて、そこで幾人もの若者が舞台の仕込みに励んでいたのである。造船所の事務棟らしく天井が高いため階高は十分で、2階から下を覗き込むと吸い込まれそうなほどの大穴が開いている。いわば奈落の底を舞台に仕上げようというのだ。工場という特異な空間のみが生み出さうる演劇の場ではあるまいか。同じ事務棟の最上階全体を占める原寸大製図室も、他にはない造船所らしいスペースだろう。この階だけは無柱で天井の低い、ただ広大な床だけの部屋になっていて、かつては巨大な部材の原寸大図面が引かれていた。

これら造船所ならではの空間が残されていけばこそ、アーティストたちの心をかき立てるのだろう。彼らの多くは20代、30代の若者で、昭和の工場跡は、彼らにとって十分に斬新かつレトロに感じられるはずだ。あるいは、歴史的遺構とすら目に映っているかもしれない、そうした場に相応しい新たな表現を模索しようとしているように感じた。従来からの機能を続けるのでも、そのままの形で保存するのでもない、第3の近代化産業遺産の活用方法の芽を名村で見たような気がした。

よく見なければ分からないが、製図室の木張りの床には部材の原寸大の線跡が、今も残されている

